令和７年６月発行

丹波山村
地域おこし協力隊

地域おこし協力隊通信

祝！鴨沢プロジェクトここに至る

vol.27

やまもと　ななこ
山本菜々子

協力隊2年目
昨年6月に丹波山村に協力隊としてやって来て鴨沢地区の空き家改修事業に取り組んで来ました。
これからも鴨沢地区が持続可能な居住地域であるよう活動を続けていきます。

命名
鴨沢文岳館
かもさわぶんがくかん

鴨沢文岳館は、丹波山村の地域おこし協力隊員が在任中、卒業後に新たな事業に挑戦する交流拠点となります。製品のテスト販売や登山ガイドの紹介、イベントの実施をメインとします。
丹波山の玄関口の顔として訪れる全ての人に協力隊からその魅力を発信していきます。丹波山村の地域おこし協力隊員 山本 菜々子さんが、空き家を丹精込めて改修し、新たな命を吹き込んだ施設です。
運営は、地域おこし協力隊サポーターズのTABANET.が行います。

命名の由来

七ツ石山や雲取山といった名峰の麓に広がる鴨沢の里は、豊かな自然と歴史が息づく場所。この「鴨沢文岳館」は、登山で疲れた体を癒すのはもちろんのこと、丹波山村を訪れるすべての方々を温かくおもてなしする場となります。
「文岳館」という名前には、明治の文豪、芥川龍之介が小河内ダムに没する前の鴨沢を訪れ、その情景を紀行文に記したという由縁が込められています。かつて文豪が歩いたこの地で、訪れる人々が新たな物語を紡ぎ、心豊かな時間を過ごせるようにとの願いが込められています。
「鴨沢文岳館」は、人と自然、人と歴史が交差する、丹波山村の新しい顔となります。地域の皆様も是非お越しください。

改修の軌跡

鴨沢文岳館

元・根石木材店は、非常に状態の悪い空き家でした。窓は割れており、動物が頻繁に出入りしていた痕跡もありました。室内には朽ちた家財で溢れ、そこに厚く積もった塵や埃が年月の長さを物語っていました。

工事の進捗状況を住民にお報せするチラシを鴨沢地区に全戸投函していました。

残地物の撤去。わずか十三坪にも満たない平屋の建物にも関わらず、室内には生活雑貨から事業で使用していたと思われる道具類で埋め尽くされていました。使えるものと不要物を分別しても、コンテナは直ぐにいっぱいになりました。

残置物が片付き、本格的な工事に入ったころには冬でした。

地域住民と何度も会合を重ね、どのような建物にするか検討しました。また鴨沢地区の歴史についても学びました。

山本さんの師匠である株式会社HOOPの本多さん、阿部さん

取材・編集 初田 登

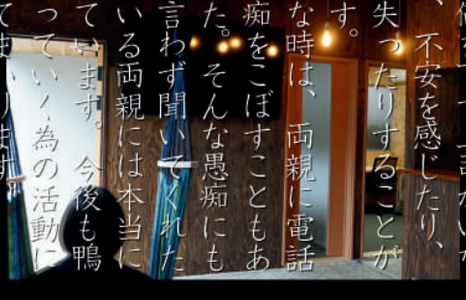
学校を卒業してから初めて取り組んだ本格的な施工でした。残置物の搬出から仕上げまで現場責任者として携われたことは、本当に良い経験でした。

限られた予算の中で設計しましたが、内装に関しては、自ら工具を握り施工に取り組みました。仕上げの後半は、塗装屋さんみたいでしたね。（笑）

周りの豊かな自然環境に溶け込める建材を使用し、廃棄物があまり出ない施工方法を心がけました。

これからここを利用する仲間たちが新しいことに挑戦する場所になることを期待しています。

現場監督として、地域住民の皆さんや関係者の方々に発表やプレゼンの機会をいただき、人前で話す苦手意識を少し克服できました。考えるだけでなく、実際に手を動かし慣れることが何より大事だと実感しました。

地域おこし協力隊には、全く同じ仕事をする同僚や、評価を下す上司がいないため、不安を感じたり、自信を失ったりすることがあります。

そんな時は、両親に電話して愚痴をこぼすこともありました。そんな愚痴にも文句も言わず聞いてくれた福島にいる両親には本当に感謝しています。今後も鴨沢が残っていく為の活動に邁進してまいります。